

見俗菟木

泉鏡太郎

青空文庫

苗賣なへうりの聲こゑは、なつかしい。

……垣かきの卵うの花はな、さみだれの、ふる屋やの軒のきにおとづれて、
朝顔あさがほの苗なへや、夕顔ゆうがほの苗なへ……

またうたに、

……田舎ゐなかづくりの、かご花活はないけに、づつぷりぬれし水みづい
色いろの、たつたを活いけし樂たのしきは、心こゝろの憂うさもどこへや

ら……

小うたの寄よせ本ほんで讀よんだだけでも一寸ちよつと意氣いきだ、どうして悪わるく
ない。が、四疊よでふはん半はんでも六疊ろくでふでも、琵琶びはだな棚たなつきの廣間ひろまでも、そ
こは仁體にんてい相さう應おうとして、これに調子てうしがついて、別嬪べつぴんの聲こゑで聞き

かうとすると、三味線の損料だけでもお安くない。白い手の指環の税がかゝる。それに、われら式が、一念發起に及んだほどお小遣を拂いて、羅の褌に、すつと長じゆばんの模様が透く、……水色の、色氣は（たつた）で……斜に座らせたとした所で、歌澤が何とかで、あのはにあるの、このはにないのと、浅間の灰でも降つたやうに、その取引たるや、なか／＼むづかしいさうである。

先哲いはく……君子はあやふきに近よらず、いや頼杖で讀むに限る。……垣の卵の花、さみだれの、ふる屋の軒におとづれて……か。

わる悪いことは申さぬ。これに御同感の方々、は、三味線でお

聞きになるより、字でお讀みになる方が無事である。――

下町の方は知らない。江戸のむかしよりして、これを東

京の晝の時鳥ともいひたい、その苗賣の聲は、近頃聞

くことが少くなつた。偶にはくるが、もう以前のやうに山の手の

邸町、土べい、黒べい、幾曲りを一聲にめぐつて、透つ

て、山王様の森に響くやうなのは聞かれぬ。

久しい以前だけれども、今も覚えて居る。一度は本郷龍岡

町の、あの入組んだ、深い小路の真中であつた。一度は芝の、

あれは三田四國町か、慶應大學の裏と思ふ高臺であつた。

いづれも小笠のひさしをすゑ、脚半を軽く、しつとりと、拍

子をふむやうにしつゝ聲にあやを打つてうたつたが……うたつ

たといひたい。わたしは上手の名曲を聞いたと同じに、十五年の今も忘れないからである。

この朝顔、夕顔に續いて、藤豆、隠元、なす、さゝげ、

唐もろこしの苗、また胡瓜、糸瓜——令嬢方へ愛相に（お）

の字をつけて——お南瓜の苗、……と、砂村で勢ぞろひに及

んだ、一騎當千、前栽の強物の、花を頂き、蔓手綱、威

毛をさばき、装ひに濃い紫を染などしたのが、夏の陽炎に幻

影を顯はすばかり、聲で活かして、大路小路を縫つたのも中

頃で、やがて月見草、待よひ草、くじやく草などから、ヒヤ

シンス、アネモネ、チウリップ、シクラメン、スカートパイ。笛

を吹いたら踊れ、何でも舶來ものの苗を並べること、尖端新語

辭典じてんのやうになつたのは最近さいきんで、いつか雜曲ざつぎよくに亂みだれて來きた。

決けつして悪わるくいふのではない、聲こゑはどうでも、商賣しやうばいは道みちによ

つて賢かしこくなつたので、この初夏しよかも、二人ふたりづれ、苗賣なへうりの一組ひとくみが、

下六番町しもろくばんちやうを通とほつて、角かどの有馬家ありまけの黒堀くろべいに、雁がんが歸かへるやうに

小笠をかさを浮うかして顯あらはれた。

——紅花べにばなの苗なへや、おしろいの苗なへ——特とくに註ちゆうするに及およぶまい、

苗賣なへうりの聲こゑだけは、草くさ、花はなの名ながそのまゝ、でうたになること、波なみ

の鼓つづみ、松まつの調しらべに相あひひとしい。床とこの間まものの、ぼたん、ばらより

して、缺摺鉢かけすりばち、たどんの空箱あきばこの割長屋わりながや、松葉まつばぼたん、唐たうが

辛子らしに至いたるまで聲こゑを出だせば節ふしになる。むかし、下しもの句くに（それ

につけても金かねの欲ほしさよ）と吟ぎんずれば、前句まへくはどんなでもぴつた

りつく。(ほとゝぎすなきつるかたをながむれば)——(それに
つけてもかねのほしきよ、)——一寸見本がこんなところ。古
池や、でも何でも構はぬ、といった話がある。もつともだ。う
ら盆で餘計身にしみて聞こえるのと、卑しいけれども、同じであ
らう。

その……

——紅花の苗や、おしろいの苗——

小うたなるかな。ふる屋の軒におとづれた。何、座つて居ても、
苗屋の笠は見えるのだが、そこは凡夫だ、おしろいと聞いたばかりで、
破すだけ越に乗だして見たのであるが、續いて、

——紅鶏頭、黄鶏頭、雁來紅の苗。……とさか鶏

頭いとう、やり鶏頭けいとうの苗なへ——

と呼んだ。繪ゑで見みせない、と、手てつきや口くちの説明せつめいでは、なか／＼形かたが見みせられないのに、この、とさか鶏頭けいとう、やり鶏頭けいとうは、いひ得えてうまい。……學者がくしやの術語じゆつごばなれがして、商賣しやうばいによつて賢かしこしである、と思おもつたばかりは二人組ふたりぐみかけ合あひの呼聲よびごゑも、實じつは玄米げんまいパンと、ちんどん屋や、また一いつしよ所しよになつた……どぢやう、どぢやう、どぢやう——に紛まぎれたのであつた。

こちらで氣きをつけて、聞迎きむかへるのでなくつては、苗賣なへうりは、雜音ざつおんのために、どなたも、一寸氣ちよつときがつかないかも知しれぬと思おもふ。

まして深夜しんやの鳥とりの聲こゑ。

俳諧はいかいには、冬の季ふゆきになつて居たはずだが、みづづくは、春はるの末すゑから、眞夏まなつ、秋あきも鳴く。……ともすると梅雨つゆうちの今頃いまごろが、あの、忍術にんじゆつつかひ得意とくいの時ときであらうも知れぬ。魔法まはふ、妖えうじゆ術つ、五月暗さつきやみにふさはしい。……よひの間まのホウ、ホウは、あれは、夜鷹よたかだと思はれよ。のツホウホー、人魂ひとたまが息吹いぶきをするとかいふ聲こゑに、藍暗らんあん、紫色ししよくを帶たいして、のりすれ、のりほせのないは、木菟みづくで。……大抵たいてい眞夜中まよなかの二時にじ過ぎから、一時ひとときほどあひだあひだとほ、近くちか、一羽いちばだか、二羽にばだか、毎夜まいよのやうに鳴くなのき間まを遠く、近く、一羽だか、二羽だか、毎夜のやうに鳴くのを聞く。寝ねがての夜の慰なぐさみにならないでもない。

陽氣やうきの加減かげんか、よひまどひをして、直ぢき町内ちやうないの大銀杏おほいてふ、

ポプラの古樹ふるきなどで鳴く事ことがあると、梟ふくろだよ、あゝ可恐こはい。……
 私わたしの身邊しんぺんには、生あいにくそんな新造しんぞうは居ゐないが、とに角かく、ふくろ
 にして不氣味ぶきみがる。がふくろの聲こゑは、そんな生なま優やさしいものでは
 ない。——相州さうしゅう逗子づしに住すまつた時とき、秋あきもややたけた頃ころ、雨あめはなか
 つたが、あれじみた風かぜの夜中よなかに、破屋あばらやの二階にかいのすぐその欄干らんかん
 と思おもふ所ところで、化ばけた禪坊主ぜんぼうずのやうに、喝どつかつをくはしたが、思おも
 はず、引ひき息いきで身震みふるひした。唐突だしぬけに犬いぬがほえたやうな凄まじい
 ものであつた。

だから、ふくろの聲こゑは、話はなしに聞きく狼おほかみがうなるのに紛まぎれよう。……
 ……みゝづくの方は、木精こだまが戀こひをする調子てうしだと思おもへば可いい。が、い
 づれ魔まものに近ちかいのであるから、又またばける、といはれるのを慮おもんばか

て、内々遠慮がちに話したけれども、實は、みづくは好きである。第一形が意氣だ。——閨、いや、寢床の友の、——源語でも、勢語でもない、道中膝栗毛を枕に伏せて、どたりとなつて、もう鳴きさうなものだと思ふのに、どこかの樹の茂りへ顯はれない時は、出来るものなら、内懷に隻手の印を結んで、屋の棟に呼びたい、と思ふくらゐである。

旅行をしても、この里、この森、この祠——どうも、みづくがみさうだ、と直感すると、果して深更に及んで、ぽつと、顯はれ出づるから則ち話せる。——のツほーほう、ほツほう。「おいでなさい、今晚は。……」

つい先月の中旬である。はじめて外房州の方へ、まこ

とに緊縮な旅行をした、その時——

待て、旅といへば、内にゐて、哲理と岡ぼれの事にばかり凝つ

てゐないで、偶には外へ出て見たがよい。よしきり（よし原すゞ

め、行々子）は、麥の蒼空の雲雀より、野趣横溢して親しみ

がある。前にいつたその逗子の時分は、裏の農家のやぶを出ると、

すぐ田越川の流れの續きで、一本橋を渡る所は、たゞ一面

の蘆原。満潮の時は、さつと潮してくる浪がしらに、虎斑の

海月が乗つて、あしの葉の上を泳いだほどの水場だつたが、三

年あまり一度もよしきりを聞いた事……無論見た事もない。

後に、奥州の平泉中尊寺へ詣でたかへりに、松島へ

行く途中、海の底を見るやうな岩の根を抜ける道々、傍の小沼

の蘆あしに、くわらくわいち、くわらくわいち、ぎやう、ぎやう、ぎやう、ちよツ、ちよツ、ちよツ……を初音はつねに聞きいた。

まあ、そんなに念ねんいりにいはないでも、凡鳥おとらすの勘左衛門かんざゑもん、雀すずめの忠三郎ちゆうざぶらうなどより、鳥とりでこのくらゐ、名なと聲こゑの合致がっちしたものは少すくなからう、一度いちどもまだ見聞みききした覺おぼえのないものも、聲こゑを聞きけば、すぐ分わかる……

ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし。

もしく、久保田くぼたさん、と呼よんで、こゝで傘雨さんうさんにお目めにかゝりたい。これでは句くになりますまいか。

ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし。

顔と腹を横に揺つて、万ちやんの「折合へません」が目に見える。

加賀の大野、根生の濱を歩行いた時は、川口の洲の至る所、
 蘆一むらさへあれば、行々子の聲が渦を立てた、蜷の居る渚に寄
 れば、さらさらと袖ずれの、あしのもとに、幾十羽ともない、
 くわらくわいち、くわらくわいち、ちよツ、ちよツで。ぬれ色の、
 うす紅らんだ莖を傳ひ、水をはねて、羽の生えた鮒で飛回る。
 はらくくと立つて、うしろの藁屋の梅に五六羽、椿に四五羽、ち
 よツちよツと、旅人を珍しさうに、くちばしを向けて共音にさ
 へづつたのである。——なじみに成ると、町中の小川を前にし
 た、旅宿の背戸、その水のめぐる柳の下にも来て、朝はやくから

音信おとづれた。

……次手ついでに、おなじ金澤かなざはの町まちの旅宿よしゆくの、料理人れうりにんに聞きいたの

であるが、河蟬かはせみは麤もちを恐おそれない。寧ろむし知しらないといつても可いい。

庭にはの池いけの鯉こひを、大小計だいせうはかつてねらひにくるが、仕しかけさへすれば、

すぐにかゝる。また、同國どうこくで、特産とくさんとして諸國しよこくに貨くわする、

鮎釣あゆつりの、あの蚊針かばりは、すごいほど彩色さいしきを巧たくみに昆蟲こんちゆうを模もして

造つくる。針はりの稱なに、青柳あをやぎ、女郎花をみなへし、松風まつかぜ、羽衣はごろも、夕顔ゆふがほ、日

中なか、日暮ひぐれ、螢ほたるは光ひかる。(太公望たいこうぼう)は諷ふうする如ごとくで、殺生道せつしやうだう

具ぐに阿彌陀あみだは奇きなり。……黒海老くろえび、むかで、暗やみがらす、と不氣ぶき

味みになり、黒虎くろとら、青蜘蛛あをぐもとすぐくなる。就なかんづく中なか、ねうちもの

は、毛卷けまきにおしどりの羽毛うまうを加工かこうするが、河蟬かはせみの羽はねは、職しよくに

人のもつとも欲するところ、特に、あの胸毛の火の燃ゆる緋は、魔の如く魚を寄せる、といつて價を選ばないさうである。たゞ斷つて置くが、その揺る篝火の如き、大紅玉を抱いた彼のをんなは、四時ともに殺生禁斷のはずである。

さて、よしきりだが、あのおしやべりの中に、得もいはれない、さびしい情の籠つたのがうれしい。いふまでもなく番町邊では、あこがれる蛙さへ聞かれない。どこか近郊へ出たら、と近まはりで尋ねても、湯屋も床屋も、釣の話で、行々子などは對手にしない。ひばり、こま鳥、うぐひすを飼ふ町内名代の小鳥ずきも、一向他人あつかひで對手にせぬ。まさか自動車で、ドライブして、捜して回るほどの金はなし……縁の切れめか、よ

し原はらすゞめ、當たうぶん分ぶんせかれたと斷あきら念まめて居ゐると、當たうねん年ねん五ご月がつ—

—房ぼう州しゅうへ行いつた以い前ぜんである。

馬ば鹿かの—覺ひとつおほえ、といふのだらう。あやめは五ご月がつと心こゝろ得え

た。一いちど度ど行いつて見みよう見みようで、まだ出でかけた事ことのない堀ほり切きりへ

……急いそぎ候さかほどに、やがて着つくと、引ひきぞ煩わづらはぬいづれあやめ

が、憚はげりながら葉はばかりで伸のびて居ゐた。半はん出で來きの藝げい妓しや——淺あさく

草さのなにかしと札ふだを建たてた——活いき人にん形ぎやうをのぞくところを、

唐だ突しぬけ、くわらく、くわら、と蛙かへるに高たか笑わらひをされたのであ

る。よしよしそれも面おも白しろい。あれから柴しば又またへお詣まりしたが、

河かは甚じんの鰻うなぎ……などと、贅ぜいは言いはない。名めい物ぶつと聞きく切きり干ぼし大だい

根んの甘あまいにほひをなつかしんで、手て製せいののり巻まき、然しかも稚ち氣き愛あいす

べきことは、あの渦巻うづまきを頬張ほくばつたところは、飲友のみとも達は笑わらはば
 笑わらへ、なくなつた親おやどもには褒美ほうびに預あづからうといふ、しをらしさ
 のおかげかして、鴻こうの臺だいを向むかうに見みる、土手どてへ上あがると、鳴なく、鳴な
 く、鳴なくぞ、そこに、よしきり。

巢すだ立ちの頃ころか、羽音はおとが立たつて、ひらくと飛交とびかはす。

あしの根ねに近ちかづく、またこの長ちやう汀うてい、風かせさわやかに吹通ふきとほ

して、人影ひとかげのないもの閑しづかさ。足音あしおとも立たつたのに、子供こどもだら

う、恐れおそれ氣げもなく、葉先はさきへ浮うきだし、くちばしを、ちよんと黒くろく、

顔かほをだして、ちよ、ちよツ、とやる。根ねに潜ひそんで、親鳥おやどりが、け

た、ましく呼よぶのに、親おやの心こころ、子知こしらずで、きよろりとしてゐる。

「おつかさんが呼よんでるぢやないか。葉はの中なかへ早はやくお入はひり——人に

人間にんげんが居ゐて可こ恐おそいよ。」

「人間にんげんは飛とべませんよ、ちよツ、ちよツ、ちよツちよツ。」

「犬いぬがくるぞ。」

「をぢちやんぢやあるまいし……」

やゝ長ながめな尾ををびよんと匆はねた——こいつ知しつて居ゐやあがる。

前後ぜんご左右さいう、たゞ犬いぬは出ではしまいかと、内ない々くびくくもので居ゐる

事ことを。

「犬いぬなんか可こ恐おそくないよ。ちツちツちツ。」

畜ちく生しやうめ。

「これく——坊いちぼうや、坊いちぼうや、くわらかいち、くわらかいち。」

それお母つかさんが叱しかつて居ゐる。

可愛かはいいこの一族いちぞくは、土手どての續つゞくところ、二里にり三里さんり、蘆あしとともに榮さかえて居ゐる喜よろこぶべきことを、日ひならず、やがて發見はつけんした。――房州ぼうしゅうへ行く時ときである。汽車きしやが龜戸かめんどを過すぎて――あゝ、このあひだの堤どての續つゞきだ、すぐに新小岩しんこいはへ近ちかづくとき、窓まどの下したに、小兒どもが溝板どぶいたを驅かけだす路傍みちばたのあしの中に、居ゐる、居ゐる。ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし。

「をぢさんどこへ。……」

と鳴ないて居ゐた。

白鷺しらさぎが――私わたしはこれには、目覺めざむるばかり、使つかつて居ゐた安やす扇せん子の折目をりめをたゞむまで、えりの涼すずしい思おもひがした。嘗かつて、ものに記しるして、東海道中とうかいだうちう、品川しながはのはじめより、大阪おほさかまはり、

山陰道を通じて、汽車から、婀娜と、しかして、窈窕と、野に、禽類の佳人を見るのは、蒲田の白鷺と、但馬豊岡の鶴ばかりである、と知つたかぶりして、水上さんに笑はれた。「少しお歩行きなさい、白鷺は、白金（本家、芝）の庭へも來ますよ。」つい小岩から市川の間、左の水田に、すらくと三羽、白い棲を取つて、雪のうなじを細りとたゞずんで居たではないか。

のみならず、汽車が千葉まはりに響田……を過ぎ、大網を本納に近いた時は、目の前の苗代田を、二羽銀翼を張つて、田毎の三日月のやうに飛ぶと、山際には、つらくと立並んで、白い燈のやうに、青葉の茂みを照すのをさへ視たのである。

目的の海岸——某地に着くと、海を三方——見晴して、旅
 館の背後に山がある。上に庚申のほこらがあると聞く。
 町並、また漁村の屋根を、隨處に包んだ波状の樹立の
 たゞずまひ。あの奥遙に燈明臺があるといふ。丘ひとつ、高
 き森は、御堂があつて、姫神のお庭といふ。丘の根について三
 所ばかり、寺院の棟と、ともにそびえた茂りは、いづれも銀杏
 のこずゑらしい。

……と表一階、三十室ばかり、かぎの手にづらりと並んだ、
 いぬゐの角の欄干にもたれて見まはした所、私の乏しい經驗
 によれば、確にみづくが鳴きさうである。思つたばかりで、そ
 の晩は疲れて寝た。が次の夜は、もう例によつて寝られない。刻

と、巻^{まき}たばこを枕^{まくらもと}元^{もと}の左右^{さいう}に、二嬌^{にけう}の如^{ごと}く侍^{はべ}らせつゝも、この煙^{けむり}は、反魂香^{はんこんかう}にも、夢^{ゆめ}にもならない。とほけて輪^わになれ、その輪^わに耳^{みみ}が立^たつてみゝづくの影^{かげ}になれ、と吹^ふかしてゐると、五月^{さつき}やみが屋^やを壓^{あつ}し、波^{なみ}の音^{おと}も途絶^{とだ}ゆるか、鐘^{かね}の音^ねも聞^きこえず、しんとする。

刻限^{こくげん}、到限^{こくげん}。

——のツ、ほツほう——

「あゝ、おいでなさい。……今晩^{こんばん}は。」
 隣^{となり}の間の八疊^{まはちでふ}に、家内^{かない}とその遠縁^{とほえん}にあたる娘^{むすめ}を、遊^{あそ}びに一^ひ人^{ひと}預^{とあづ}かつたのと、ふすまを並^{なら}べてゐる。兩^{りやう}人の裾^{すそ}の所^{ところ}が、床^{とこ}の間横^{まよこ}、一^{いつ}間に三^{さん}二^じ尺^{しゃく}、張^{はり}だしの半戸^{はんと}だな、下^{した}が床張^{ゆかば}り、突^つ

きあた
 當りがガラス戸の掃だし窓で、そこが裏山に向つたから、丁
 どその窓へ、松の立樹の——二階だから——幹がすくくと並
 である。枝の間を白砂のきれいな坂が畝つて抜けて、その丘の上
 せうがくかう
 に小學校がある。ほんの拔裏で、ほとんど學校がよひのほ
 か、用のない路らしいが、それでも時々人通りがある。—
 —寝しなに女連のこれが問題になつた。ガラスを通して、
 ふすまが松葉越しに外から見えよう。友禪を敷いた鳥の巢のや
 うだ。あら、裾の方がくすぐつたいとか、何とかで、娘が騒いで、
 まづ二枚折の屏風で圍つたが、尚隙があいて、燈が漏れさう
 だから、淡紅色の長じゆばんを衣桁からはづして、鹿の子の扱帯
 いっしょ
 と一所に、押つくねるやうに引かけて塞いだのが、とに角一

寸媚となまめかしい。

魔まものの鳥とりが、そこを、窓まどをのぞくやうに鳴ないたのである。――
 晝ひる見た、坂さかの砂道すなみちには、青あをすすき、蚊帳かやつり草ぐさに、白しろい顔かほの、
 はま晝顔ひるがほ、目まぶたを薄紅うすべにに染そめたのなどが、松まつをたよりに、ち
 らちらと、幾いくたり人も花はなをそろへて咲さいた。いまその露つゆを含ふくんで、
 寝顔ねがほくちびるの唇くちびるのやうにつぼんだのを、金こん色じきのひとみに且かつ青あをく宿やどし
 て……木菟みづくよ、鳴なく。

が、鳥とりの事ことはいはれない。今朝けさ、その朝あさ、顔かほを洗あらつたばかりの
 所ところ、横縁よこえんに立たつた娘むすめが、「まあ容よう子すのいゝ、あら、すてきにシ
 ヤンよ、をぢさん、幼稚園えうちゑんの教けう員ゐんさんらしいわ。」「おつと
 来きたり。」「お前まへさんお茶ちやがこぼれますよ。」「知しつてる。」「と

下に置けばいゝものを、満々とあるのを持ちかへようとして沸
 き立つて居るから振りこぼして、あつゝ。「もうそつちへ行くわ、
 靴だから足が早い。」「心得た。」下のさか道の曲れるを、二
 階から突切るのは河川の彎曲を直角に、港で船を扼する
 が如し、諸葛孔明を知らないか、とひよいと立つて件の袋
 戸だなの下へ潜込む。「それ、頭が危いわ。」「合點だ。」
 といふ下から、コツン。おほゝゝほ。「あゝ残念だ、後姿
 だ。いや、えり脚が白い。」といふ所を、シヤンに振向かれて、
 南無三寶。向直らうとして、又ゴツン。おほほほゝ。……で、
 戸だなを落した喜多八といふ身ではひだすと、「あの方、ね、友
 禪のふる敷包を。……かうやつて、少し斜にうつむき加減

に、「とおなじ容子ようすで、ひぢへ扇子せんすの、扇子せんすはなしに、手つきで袖そでへ一寸舞振まひぶり。……娘むすめの舞振まひぶりは、然さることだが、たれかの男をとこ振ぶりは、みづづくより苦にが々くしい。はツはツはツはツ。
 叱しつ！……これ丑満時うしみつどきと思おもへ。ひとり笑わらひは怪ばけものじみると、獨ひとりでたしなんで肩かたをすくめる。と、またしんとなる。

——のツほツほ——五聲いつごゑばかり窓まどで鳴ないて、しばらくすると、山やまさがりに、ずつと離はなれて、第一だいいちの寺てらの銀杏いてふの樹きと思おもふあたりで、聲こゑがする。第二だいにの銀杏いてふ——第三だいさんへ。——やがて、もつとも遠とほくかすかになるのが——峰みねの明みやうじん神もりの森もりであつた。

東京とうきやう——番町ばんちやう——では、周圍しうゐの廣ひろさに、みづづくの聲こゑは南北なんぼくにかはつても、その場所ばしよの東西とうざいをさへわきまへにくい。

……こゝでは町も、森も、ほとんど一浦のなぎさの盤にもるがごとく、全幅の展望が自由だから、瀬も、流れも、風の路も、鳥の行方も知れるのである。又禽類の習性として、毎夜、おなじ場所、おなじ樹に、枝に、かつ飛び、かつ留るものださうである。心得て置く事で……はさんでは棄てる蛇の、おなじ場所に、おなじかま首をもたげるのも、敢て、咒詛、怨霊、執念のためばかりではない事を。

……こゝに、をかしな事がある。みづづくのあとへ鼠が出る。蛇のあとでさへなければ可い。何のあとへ鼠が出て、ちつとも差支はないのであるが、そのみづづくが窓を離れて、第一のいてふへ飛移つたと思ふ頃、おなじガラス窓の上の、眞片

隅^み、ほとんど鋭^{えい}角^{かく}をなした所^{ところ}で、トン、と音^{おと}がする。……續^{つゞ}いて、トン、と音^{おと}がする。女^{をんな}二人^{ふたり}の眠^{ねむ}つた天井裏^{てんじやうら}を、トコ、トン、トコ、トン、トコ、トン、トコ、トン。は、あ鼠^{ねずみ}だ。が、おほ大^{おほ}げさではない、妙^{めう}な歩^{ある}行きかただ、と、誰^{どなた}方も思^{おも}はれよう^{かんが}と考^{かんが}へる。

お互^{たがひ}に——お互^{たがひ}は失^{しつれい}禮^{れい}だけれど、破^{あば}屋^{らや}の天^{てん}井^{じやう}を出^でてくる鼠^{ねずみ}は、忍^{しの}ぶにしろ、荒^あれるにしろ、音^{おと}を引^ひずつて回^{まは}るのであるが、こゝのは——立^たつて後^{あと}脚^{あし}で歩^{ある}行^{ある}くらしい。はてな、じつと聞^きくと、小^{ちひ}さな麻^{あさ}がみしもでも着^きて居^ゐさうだ、と思^{おも}ふうち、八^{はち}疊^ふに、私^{わたし}の寢^ねた上^{うへ}あたりで、ひつそりとなる。一^{ひと}呼^い吸^き抜^ぬいて置^おいて、唐^{だし}突^{ぬけ}に、ばりくばりく、びしり、どん、廊^{らう}下^かの雨^あ

まどそと 戸外のトタン屋根がすさまじく鳴響く。ハツと起きて、廊下へ出た。退治る氣ではない、迷路を搜したのである。

屋根に、忍術つかひが立つたのでも何でもない。それ切で、第二の銀杏にみづくの聲が呖えた。

更に人間に別條はない。しかし、おなじ事が三晩續いた。

刻限といひ、みづくの窓をのぞくから、飛移るあとをた

めて、天井の隅へトン、トコ、トン、トコ、トン——三晩め

は、娘も家内も三人起き直つて聞いたのである。が、びりく、

がらん、どぐん、としても、もう驚かない。何事もなしとする

と、寢覺めのつれ／＼には面白し、化粧鼠。

どれ、これを手づるに、鼠をゑさに、きつね、たぬき、大きく

いへば、千倉ヶ沖の海坊主、幽霊船でも釣ださう。

如何に、所の人はわたり候か。——番頭を呼だすも氣の毒だ。

手近なのは——閑静期とかで客がないので、私どもが一番の

座敷だから——一番さん、受持の女中だが、……そもく

これには弱つた。

旅宿に着いて、晩飯と……お魚は何ういふものか、と聞いた、

のつけから、「銀座のバーから来たばかりですからねえ。」——

「姉さん、向うに見える、あの森は。」「銀座のバーから来たば

かりですからねえ。」うっかりして「海へは何町ばかりだえ

。」「さあ、銀座のバーから来たばかりですからねえ。」あゝ、

修業はして置く事だ。人の教へを聞かないで、銀座にも、新

宿にも、バーの勝手を知らないから、旅さきで不自由する。も
 つとも、後に番頭の陳じたところでは、他の女中との詮衡
 上、花番とかに當つたからださうである。が、ぶくりとして、
 あだ白い、でぶくと肥つた肉貫——（間違へるな、めかたで
 ない、）——肉感の第一人者が、地響を打つて、外房
 州へ入つた女中だから、事が起る。

たしか、三日目が土曜に當つたと思ふ。ばらくと客が入つた。
 中に十人ばかりの一组が、晩に藝者を呼んで、箱が入つた。
 申兼ねるが、廊下でのぞいた。田舎づくりの籠花活に、一
 寸（たつた）も見える。内々一聲ほとゝぎすでも聞けよう
 と思ふと、何うして……いとが鳴ると立所に銀座の柳である。

道頓堀だうとんぼりから糸屋いとやの娘むすめ……女朝日をんなあさひな奈の島しまめぐりで、わしが、ラ
 ばさんしうちやう酋むすめ長の娘なんやうと南洋だいきえんで大氣焰をど。踊れ、踊れ、と踊り
 回まはつて、水戸みとの大洗節おほあらひぶしで荒あれるのが、残のこらず、銀座ぎんざのバーか
 ら來きた、大女おほをんなの一人ひとり藝げいで。……酔よつた、食くつた、うたつた、
 踊をどつた。宴席えんせきどなりの空部屋あきべやへ轉ころげ込こむと、ぐたりと寢ねたが、
 したゝか反吐へどをついて、お冷水ひやを五杯ごはい飲のんだとやらで、ウイーと
 受持うけもちの、一番いちばんさんへ床とこを取りとに來きて、おや、旦那だんなは酔よつて轉ころ
 げてるね、おかみさん、つまんで布團ふとんへ載のつけなさいよ。枕まくらもと
 の煙草盆たばこぼんなんか、娘むすめさんが手傳てつだつてと、……あゝ、私わたしは大儀たいぎだ
 。「はい。」「はい。」と女をんなどもが、畏かしこまると、「翌日あしたは又またお
 みおつけか。オムレツか、オートミルでも取とればいゝのに。ウイ

……」廊下を、づし／＼歩行きかけて、よたく／＼と引返し「おつけの實は何とかいっただね。さう、大根か。大根、大根、大根でセー」と鼻うたで、一つおいた隣座敷の、男の一人客の所へ、どしどしどしん、座り込んだ。「何をのんびりして

るのよ、あは／＼は、ビールでも飲まんかねえ。」前代未聞といツつべし。

宴會客から第一に故障が出た、藝者の聲を聞かなか、千倉とか、停車場前のカフェーへ退身、いや、榮轉したさうである。寧ろ痛快である。東京うちなら、郡部

でも、私は訪ねて行つて、飲まうと思ふ。

といつたわけで……さしあたり、たぬきの釣だしに間に合はず、
 とすると、こゝに當朝日新聞のお客分、郷土學の總本
 山、内々ばけものの監査取しまり、柳田さん直傳の手
 段がある。直傳が行きすぎならば、模倣がある。

土地の按摩に、土地の話を聞くのである。

「——木菟……木菟なんか、あんなものは……」
 いきなり麻がみしもの鼠では、いくら盲人でも付合ふまい。
 そこで、寢ころんで居て、まづみづくの目金をさしむけると、
 のつけから、ものにしない。

「直ねになりませんな、つかまへたつて食くへはせざちや。」

あつ氣けに取とられたが、しかし悟さとつた。……嘗かつて相州さうしゅうの某温ぼうをん

泉せんで、朝あさ夕ゆふちつともすぐめが居ゐないのを、夜分按摩やぶんあんまに聞きいて、

歎たん息そくした事ことがある。みんな食くつてしまつたさうだ。「すぐめ三

羽んばに鳩は一羽いちばといつてね。」と丁ちやんと格かく言げんまで出で來きて居ゐた。それか

ら思おもふと、みゝづくを以もつて、忽たちまち食しょく料れう問もん題だいにする土地とちは人にん氣き

が穩おだやかである。

「からすの方ほうがましぢやね、無駄鳥むだどりだといつても、からすの方ほうが

ね、あけの鐘かねのかはりになるです、はあ、あけがらすといつてね。

時ときにあんた方がたはどこですか。東とう京きやうかね——番町ばんちやう——海かい

水浴みよく、避暑ひしよにくる人ひとはありませんかな。……この景氣けいきだから、

ことし 今年は勉べんきやう強ぢやよ。八疊はちでふに十疊じふでふ、眞新まあたしいので、百ひやく

五十圓ごじふえんの所ところを百ひやくに勉べんきやう強ぢやよするですわい。」

おほ 大きな口くちをあけて、仰向あふむいて、

「七八九、三月みつぎですが、どだい、安やすいもんぢやある。」

かない 家内かないが氣きの毒どくがつて、

「たんと山やまがあります、たぬきや、きつねは。」

「じよ、じようだんばかり、直ねが安やすいたつて、化物屋敷ばけものやしき……飛と

んでもない、はあ、えゝ、たぬき、きつね、そんなものは鯨くぢらが飲の

んでしまつた、はゝは。いかゞぢや、それで居ゐて、二階にかいで、臺だいど

所ころ一切いっさいつき、洗面所せんめんじよも……」

嗚然きぜんとして私わたしは歎たんじた。人間にんげんは斯その徳とくによる。むかし、路次ろじ

裏うらのいかさま宗そうしやう匠やうが、芭蕉ばせをの奥おくの細道ほそみちの眞似まねをして、南部なんぶのおそれ山やまで、おほかみにおどされた話はなしがある。柳田やなぎださんは、旅籠はたごのあんまに、加賀かがの金澤かなざはでは天狗てんぐの話はなしを聞き、奥州飯あうしういひのがはまちよ野川のの町まちで呼よんだのは、期きせずして、同氏どうしが研究けんきうさるゝ、おかみん、いたこの亭主ていしゆであつた。第一だいいち儼然げんぜんとして紹ろの紋もん付きを着きたあんまだといふ、天てんの授さづくるところである。

みづづくで食しよくを論ろんずるあんまは、容體ようだい倨然きよぜんとして、金貸かねかしに類るゐして、借家しやくやの周旋しうせんを強要きやうえうする……どうやら小金こがねでその新築しんちくをしたらしい。

女教員ぢよけういんさんのシヤンを覗のぞいて、戸とだなで、ゴツンの量りやうけん見けんだから、これ、天てんの戒いましむる所ところであらう。

但、いさゝか自ら安んずる所がないでもないのは、柳田さん
 は、身を以てその衝に當るのだが、私の方は間接で、よりに立
 つた格で、按摩に上をもませて居るのは家内で、私は寢ころんで
 聞くのである。ご存じの通り、品行方正の點は、友だちが受
 けあが、按摩に至つては、然も斷じて處女である。錢湯でな
 がしを取つても、ばんとうに肩を觸らせた事さへない。揉ほどの
 手つきをされても、一ちゞみに縮み上る……といつただけでもく
 すぐつたい。このくすぐつたさを處女だとすると、つらく惟
 るに、媒灼人をいれた新枕が、一種の……などは、だれも
 聞かないであらうか、なあ、みづづく。……
 鳴いて居る……二時半だ。……やがて、里見さんの眞向うの大

銀杏ほいてふへ來くるだらう。

みゝづく、みゝづく。苗屋なへやが賣うつた朝顔あさがほも、もう咲さくよ。

夕顔ゆふがほには、豆腐とうふかな——茄子なすびの苗なへや、胡瓜きうりの苗なへ、藤豆ふぢまめ、いんげん、さゝげの苗なへ——あしたのおつけの實みは……

昭和六年八月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

初出：「東京朝日新聞 第一六二五六号〜第一六二六一号」東京朝日新聞社

1931（昭和6）年8月2日〜7日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「形」に対するルビの「かた」と「かたち」の混在は、底本の

通りです。

※表題は底本では、「木菟《みゝづく》俗見《ぞくけん》」となつています。

※題名の下にあつた年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2017年10月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木菟俗見

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>